

## ストーリー・マンガの作品を利用した、異文化間理解教育の教材とプログラムの開発

因, 京子  
九州大学留学生センター准教授

松村, 瑞子  
九州大学言語文化研究院教授

<https://hdl.handle.net/2324/16838>

---

出版情報：日下翠教授中国文学・漫画学著作集成，2008-03  
バージョン：  
権利関係：

# 日本語教材の普通体会話の提示と会話実例 の質的分析

— 若い男性話者による会話を中心に —

因京子\*

王龍\*\*

**キーワード**：会話、普通体、ジェンダー、レベル、意図的逸脱、同調

本稿は、改まり度の低い会話の行い方を男性学習者に提示する方法を開発するための基礎研究の一つとして、日本語教材の中で普通体基調の会話がどのように導入されているかを分析し、且つ、小説と大学生の自然発話の二つのデータを用いて実際の普通体基調の男性の発話はどのように行われているかを観察することによって、今後の日本語教育の中でどのような情報提供を行っていかなければならないかを考察するものである。

## 1. はじめに

日本語では発話に際し、文末の丁寧レベルについての選択、及び、ジェンダー標示性のある形式・方言・俗語・くずれた形式など文体的特徴の使用についての選択が行われる。こうした選択によっ

---

\* 九州大学留学生センター・大学院比較社会文化学府

\*\* 九州大学大学院比較社会文化学府 修士課程

て同様の認知的意味を持つ発話であっても談話の中での効果は異なったものとなる。女性の話者については、文末のレベル表示やジェンダー標示形式などを含む様々な文体的特徴を、場面によって、あるいは、場面の中で、使い分け、意図や個性を表現することが報告されている（メイナード2004、因2003、2004a、2005a、松村2005）。しかし、男性の改まり度の低い会話の行い方の実態については、殆ど報告がない。

改まり度の低い会話は、文末の形式に話者の性別や年齢、出身地などを指標する形式を選択する余地があることを始め、話者の個性や意図的選択が反映される可能性が大きい。発話に込められたニュアンスを理解し、且つ、自らも適切に発話することは、学習者にとっては易しいことではない。しかし、くだけた会話を行う技能の育成は日本語教育の中であまり重点を置かれてこなかった。話す技能の教育において、初級では個人レベルでの対話の行い方が学習の中心であるが、殆ど「です・ます」体が用いられる。普通体を用いる会話についても多少は導入されるが、多くの場合、典型的な会話の例が提示され、「家族間で使用」「親しい友人同士で使用」などと使用場面が簡単に説明され、「ぞ・ぜ」「わ」などの形式が「男性使用」「女性使用」など本質主義的記述（中村2001、p. 60）と共に提示されるにとどまる。中級以上では、ビジネス場面の交渉や会議など、改まり度の高い場面での待遇表現、あるいは、プレゼンテーションやディスカッションなど専門性の高い場面での話し方の技能が中心的課題と認識されている（『新版日本語教育辞典』p. 747）。「日常会話能力は日本語を使っていく中で自然に上達する」と期待されているのか、ざっくばらんに話す技能にはあまり注意が払われていない。

しかしながら、「日本人学生は留学生について直接的な表現や自己主張が強くて怖いと感じている」（梶原2003）、「留学生は日本人の『表現の間接性』『抑制の利いた自己表現』に対して困難を感

じている」(田中・藤原1992)など、学習者と日本語母語話者との間にコミュニケーション上の問題があることが指摘されている。因(2004b、2005a)は、発話力の基礎ともいえる会話理解に上級話者となってもまだ看過できない問題を抱えていることを報告している。また、学習者自身も、「ジェンダー表現について認識できるようになりたい」(トムソン・飯田2002, Thomson and Iida 2004)など、会話の細かな特徴まで理解したいという希望を持っているようである。従って、改まり度の低い会話の運用方法に関して情報提供と指導の方法を開発することは、日本語教育の重要な課題の一つと考えられる。本稿は、その努力の一環として、日本語教育における普通体会話の導入の様相の分析と、首都東京を舞台とする小説及び福岡市の大学に学ぶ二人の大学生の自然会話データの分析とを通して、改まり度の低い、私的な場面における若い男性の話し方の指導方法開発の方向性の課題について考察するものである。

尚、本稿では、「改まり度の低い会話」を、「会話参加者の全員または主導的な参加者が、普通体を基調として話している会話」と定義する。典型的な例は対等の友人同士などであろうが、親しい関係の先輩と後輩など、社会的上位者が普通体基調で話し、下位者はそれに合わせて丁寧体を使いながらもある程度「くつろいだ感じ」を醸し出す必要がある場合(松村・因2001)を含める。

2節では、現行の日本語教育における普通体基調の会話の提示がどのように行われているのか、4つの代表的な初級教科書と参考書を概観する。続いて3節では、小説『しゃべれどもしゃべれども』(1997刊行)、4節では九州大学に学ぶ二人の男子学生の発話データを分析する。その結果に基づいて5節では、普通体を基調とする会話の指導における問題点を指摘し、今後の課題を述べる。

## 2. 現行の日本語教育の普通体会話の取扱い

### 2.1 教科書

まず、教科書を見ると、初級教科書の多くは何らかの形で普通体による会話を導入している。

表1：初級教科書における普通体会話の提示

書名 刊行年、課数	提示課	参加者	提示される特徴
An Introduction to Modern Japanese (1977, 30 課)	13,16,22-24	男性の友人同 士、夫婦、母 子、男女の友 人、客と運転士	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男性形式と女性形式を区別。</li> <li>・男女間の丁寧度の差を提示。</li> <li>・同一話者同一談話内の丁寧レベル混在を提示。</li> <li>・社会的立場によるレベルの非対照を提示。</li> </ul>
Total Japanese (1994,40課)	16-19,22-23, 25,27-29, 36-37,39	ホスト親・ 年長者と学生、 友人同士	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年長者と年少者のレベルの非対称を重点的に導入(13課中7課)。</li> <li>・自己向け発話での使用を提示。</li> <li>・対等の友人同士の発話は中性的</li> </ul>
みんなの日本 語 (1998,50課)	13,20,26,29	店員と客、 管理人と住人、 駅員と乗客、 友人同士	<ul style="list-style-type: none"> <li>・省略的表現として導入。</li> <li>・自己向け発話として導入。</li> </ul>
げんき (1999, 23課)	15,17-19, 22-23	男女の 友人同士、 上司と部下、 母子	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男女の区別のある形式を排して中性的形式を導入。</li> <li>・社会的地位による丁寧度の差を提示。</li> </ul>

*Introduction to Modern Japanese*は、発刊されてから既に30年になるが、対話者間の文末の非対称性や同一談話内でのレベル交替など、普通体使用に伴う現象を包括的に提示している。夫婦間で妻がより丁寧度の高い表現を用いることは少々古い感じがするが、これが当時の、或いは現在でも、現実の一部の反映であることは間違いない。*Total Japanese*は、ホストファミリーの父母と学生との対話

の文末の非対称性を重点的に提示している（提示のある13課中7課）。『みんなの日本語』は、自己向けの発話など非常に限られた使用しか普通体を提示していない。『げんき』では、社会的立場による文末の非対称性が重点的に提示される。また、男女の差が縮小しつつある傾向（尾崎1999）を反映して男性・女性専用と言われる文末形式が導入されないなど、より現実的な提示への努力が見られる。

以上の観察から、初級の段階でも、普通体の使用される様相をなるべく現実的に、多面的に示そうという努力がなされていることがわかる。特に、上位者と下位者の使用レベルの非対称性を提示しているのは、学習者の発信に対する配慮として有用なものと評価できる。しかしながら、普通体使用を動機づける要因についての説明は殆どなく、「運転手と客」などの社会的場面と「ホスト・ペアレントと留学生」のような私的場面との区別がなされていないことは、偏った理解を促してしまう恐れがある。確かに、「客」と「ホスト・マザー」の普通体使用を合理化する要因は「上位者という地位」であるが、両者の使用の動機は同じではない。しかし、このことについて何の説明も行われぬ。また、談話中でのレベルの交替の様相とそれが示す意味、ジェンダー表現の構築的使用の様態とそれが示す意味など、談話中での変移や、個人による違いについても、言及がない。

## 2. 2 学習者用参考書

次に、北米と台湾で用いられる代表的な参考書による扱いを見よう。まず、北米など英語圏、英語話者の学習者を対象とした *An Introduction to Japanese Grammar and Communication Strategies* (Maynard1990) の、日本語の二つのレベルについて説明は以下のようである（英語からの翻訳は因京子、以下同様）：

- (1) Formal social situations such as school, business

ceremonies or other public gathering require formal and careful style. Formal style is also recommended toward social superiors even in less formal situations. . . . An informal, casual style is used among social equals; an extremely casual style is reserved for close friends (p. 18)

(学校、仕事の会合、公的集まりなど、公的な社会的状況では改まった丁寧な文体を用いなければならない。公的でない状況でも目上に対しては改まった文体を用いた方がいい。(中略) くださった、ざっくばらんな文体は社会的同位者間で用い、非常にくだった文体を用いていいのは大変親しい間柄の場合だけである)

男女の差異については、断定の「だ」の使用、自称詞や美化の接頭語、終助詞などを包括的にあげ、

(2) The difference between masculine and feminine speech style under discussion here should be understood in the broader category of more or less blunt versus more or less gentle style. (p. 139)

(ここで言う男性と女性の話し言葉の差は、ぶっきらぼうなスタイルとおだやかなスタイルというより広い分類として理解してもらいたい)

と、必ずしも性別によって使用すべき範囲が固定しているわけではないことを示しているが、実際の使用についての情報は、男性同士、女性同士の会話の短いサンプルが巻末に付されているだけである。

この参考書は、そもそも、informal styleを学習者が使用することには明確に消極的な姿勢を見せており、情報が少ないのも驚くにはあたらない：

(3) It is better to be a little more formal than less formal -

particularly when you are learning to speak Japanese. (p. 14)

(日本語学習者は、少し改まり過ぎている方がくだけ過ぎるよりもいい)

くだけた会話についての数少ない情報は次のようなものである：

- (4) Within *uchi*, a feeling of what Doi (1973) calls *amae* “dependence” prevails. When the *amae* relationship is mutually recognized, the speech style becomes informal and casual. In fact, contrary to the common belief that Japanese are inherently formal and polite, Japanese enjoy casual and familiar relationships, and often expose and emotional vulnerability among *uchi* group members. (p. 18)

(ウチにおいては、土居 (1973) が甘えと呼ぶ依存的感情が支配的となる。「甘え」の関係が相互に認識されると、話し方はくだけたざっくばらんなものになる。実際、根っから堅苦しく丁寧だという一般に信じられている日本人像とは反対に、気の張らない親しい関係となり、ウチの構成員間では感情的な弱さを露呈することも多い)

(4) は、間違った記述ではないが、学習者がこれを読んで、一旦普通体基調で話し合う関係になったら躊躇なく率直に自己表現してもいいのだと考えても、無理はないように思われる。

同じく北米を中心に使われている *A Dictionary of Basic Japanese Grammar* (1989) では、informal/formal の区別は Maynard と同様、uchi/soto の違いによって説明しているが、蜂に刺された時の「痛い」という発話など、基調レベルに関わらず必ず普通体となる「自己向け」の発話の存在を指摘している点 (pp. 43-44) が注目に値する。しかし、これが技巧として用いられる事例 (因2003、2004 a、2005b、2005c、2006) など、実際の談話の中での応用的使用には全く言及していない。また、男女ジェンダー標示形式については性別によって使用が固定しているかのような本質主義的提示を行って

いる。

次に、台湾の参考書をみよう。大学生を中心に広く用いられている蔡茂豊 (1987) 『現代日語文的口語文法』は、「だ」と「ます」を例に、普通体と丁寧体の用法について次のような記述を行っている (中国語からの翻訳は王龍、以下同様) :

(5) 断定助詞「だ」

(ㄅ) 這是常體断定助動詞「だ」的典型形態

(ㄆ) 用在自言自語或說出口之前的思考形態

(ㄏ) 口語很少用。男性用在同輩或晚輩。

(ㄏ) 通常以「～だね」「～だよ」「～だわ」(女性) 表達。

(ㄏ) 外國人的日語教育上, 以「です」(敬體) 爲主。少用「だ」體。(pp.259-60)

(独り言か口に出さない思考に用いる。話し言葉ではあまり使わない。男性では同世代か目下に用いる。女性は普通「～だね」「～だよ」「～だわ」の形で用いる。外国人対象の日本語教育では「です」(敬体) を多用し、「だ」をあまり使わない)

(6) 美化助動詞「ます」

美化助動詞普通稱爲「敬語助動詞」。是用來對他人表示敬意時所用的。不過, 由於戰後, 日本社會民主化, 不管男女在口語上、輩分上常用了, 所以與其說它表示「敬意」不如說它是用來表示說話者的教養。因此, 筆者另取了名爲「美化助動詞」。這決不是標新立異, 而是配合目前的實際用法及意義所取。(中略) 「ます」是表示教養的助動詞, 現代口語上, 已形成「ます言葉」爲有教養的人的表達方式。(pp.279-84)

(美化助動詞ます: 美化助動詞は普通「敬語助動詞」と言う。他者に敬意を表すのに使う。しかし、戦後日本社会が民主化したため、男女とも話し言葉及び目上に対してこれを使

うようになった。従って「敬意」よりも「話し手の教養」を表すと言ったほうがよく、筆者は「美化助動詞」と名付けた。決して新しい主張を唱えているわけではなく、現代の実際の使い方及び意義に基づいた名称である。(中略)「ます」は教養を表す助動詞であり、現代の話し言葉では教養人の表現方式として「ます言葉」が形成されている。

基本的機能についての記述は断片的で、レベル交替、対話者間での非対称性などの現象、及び、それらが談話の中で持ちうる効果については、言及がない。

男女の区別については多くの記述がみられるが、いずれも「男性用」「女性用」と用法が固定しているかのような記述で、話者の個性や意図による選択の余地については述べられていない：

- (7) a. 日本的な女性、「ね」用的很多、聽起來非常舒服(p. 529)。  
(日本の女性は「ね」を多く用いる、聞き心地がいい。)
- b. 表示感嘆的「な」、是男性用語(p. 538)。  
(感嘆を表す「な」は男性用語である)
- c. 「ぞ」「ぜ」是男性用語。固然老太婆也有用「ぜ」的、但年輕女性千萬別亂用(p. 545)。  
(「ぞ」「ぜ」は男性用語である。しかしながら老婆でも「ぜ」を用いることがあるが、若い女性は決して変に使用しないように。)
- d. 「上手だって褒めてたわ」(p. 403)。(女性用語)

また、性別を、主観・客観、断定性の強弱などの他の特徴と直結させる記述が多く見られる：

- (8) a. 「から」表示主観、「ので」表示客観、難怪女性常見「ので」、男性多用「から」(p. 459)。  
(「から」は主観を表し、「ので」は客観を表す。女性がよく「ので」を、男性が多く「から」を用いるわけである。)
- b. 「の」表示輕微的斷定時、爲女性用語(pp. 547-8)。

(「の」は軽く断定する場合を表し、女性用語である。)

上にあげた他にも、多くの形式について言及があるが、どちらかの性に専用という記述が殆どである (p. 14, pp. 354-56, p. 521, pp. 549-50, pp. 552-54, p. 564)。

次に、比較的最近の陳伯陶『日本語と修辞』(1997)では、男性の言葉についての記述は限られていて、女性語と対比して付加的に述べられているものが多い：(以下の引用は原文のまま)

- (9) a. 「君」男の学生用語として使われているが、一般に男性間では対等及び年下の男性に対して用いる。男女共学で育った若い女性は同級生や下級生の男の子を「・・・君」で呼ぶことも珍しくなくなりつつある (p. 14)。
- b. 男は「ぼく」「おれ」「わし」などを使うが、いずれも対等か目下のものに用いる。目上には使えない (p. 30)。
- c. 男性の一人称詞：「わたくし」「わたし」「ぼく」「おれ」の四種類がある。もちろん「わし」「拙者」などもあるが、「あたい」は女性用語で男性では使わない。この使用範囲を示してみるとフォーマル——インフォーマルの尺度によって違ってくる (p. 120)。
- d. 修飾語と間投詞：女性は男性より感情的に、柔らかくものを言う。「あらっ」「まあ」「うわぁ」などは、女性が使う間投詞で喜びや驚きを柔らかく、品よく、感情的に伝える。「おっす」「よおー」「ひえー」など男性だけが使うものは、ラフで元気の良いニュアンスを持っている。また修飾語についても、女性は男性より多く使っている。  
(p. 131)
- e. かわいらしさの表現—「わ」と「の」「よ」の終助詞「だわ」、「わ」、「わよ」、「の」について：この文末に使われる終助詞にはさまざまなニュアンスを盛り込む働きがある。女性がよく文章や話しことばの終わりにつける

「わ」「の」「よ」は、主張や断定を和らげ、丸みやかわいらしさをつける響きを持っている。・・・(中略)これに対して、男はよく「ぜ」や「ぞ」をつけるが、この「ぞ」や「ぜ」はいわゆるプロミネーションに特有な抑揚を伴い、強調の情意を盛り込んだ発言である。そしてこの「ぞ」や「ぜ」を使うことによってすごみをつけて念を押す響きを与える。「聞いてきたぞ」「聞いてきたぜ」というと、自己を顕示し、強そうに見せかける雰囲気をかもしだす (p. 126)。

いずれも印象論的に、ある形式が文脈に関わらず特定の効果を持つかような記述がなされている。女性の言葉についての記述は男性についてよりもずっと詳しいが、印象論的であるのは同様に、実情に合致しない断定や著者の個人的主張が多く含まれている：

(10) a. 女性会話の特徴：日本語にある女性会話の特徴を一口に言えば、女性は「会話のルール」をはずした話し方をすることである。この会話のルールとは、次の四つである。

1. 真実のみを言う、2. 必要な量だけ言う、3. 問題に関係したことを言う、4. 簡潔、明瞭に言う (p. 117)。

b. 女性用語：女性は、あらゆるフォーマリティーのレベルで、もっともフォーマルな形である「あなた」を使用する。男性の「きみ」に相当するものは、女性にはない (p. 124)。

c. 略式言葉：略式スタイルの表現やくだけた表現は、「女性の、場に不適當な程にインフォーマルにふるまわせてもらった」、いわば一種の「女の甘え」の文体とでも言えよう (p. 130)。

この他にも「しなやかさの表現 (p. 127)」「敬語の多用 (p. 128)」「婉曲表現 (p. 129)」「漢語をあまり使わない (p. 130)」などが挙げられているが、学習者が実際の発話を理解したり自らが発

話したりするための参考になるとは考えにくい。

このように、英語圏でのものも台湾でのものも、普通体基調の会話についての情報提供はごくわずかで、しかも信頼性が高いとは言えない。普通体基調の会話の中でジェンダー標示形式がどの程度どのように用いられるのか、普通体を使える会話では全くざつぱらんに直接的に話していいのか、それともそれなりの配慮の示し方があるのか、などの重要な点について学習者は知ることができない。

「留学生の話し方は直接的すぎる」と日本人学生が感じている（梶原、前掲）としたら、普通体基調の会話の進め方についての情報提供や指導の不足にも責任の一端があるかもしれない。

### 3. 小説に見る、若い男性話者の個人的特徴・ 語用論的意図の表出

本節では、1997年に刊行された小説『しゃべれどもしゃべれども』（佐藤多佳子著）に表れた普通体を基調とする会話を分析し、話者の個人的特徴の表出と談話的意図の表出の様態を観察する。この小説を取り上げるのは、現代の東京を舞台として複数の若い男性が登場し、発話（「せりふ」）が比較的多く含まれているからである。

この作品の主人公は26歳の落語家「今昔亭三つ葉」（本名は、外山達也）である。彼と普通体を用いて会話する男性は、三つ葉の徒弟の大学生「綾丸良」、落語家仲間の「柏家ちまき」、年齢は上であるが主人公に話し方を習っている元野球選手「湯河原太一」、大阪弁話者の小学生「村林優」が登場する。

#### 3. 1. 個人的特徴の表出

主人公の「三つ葉」とその従弟の「良」とは常にお互いに普通体基調で話すが、二人の話し方には語彙、文末形式、発話構造など複数のレベルにおいて違いが見られる。

まず、自称・呼称が違う。三つ葉は、「俺」と自称し、良には「良」「おまえ」を用いるが、一方、良は、自称は「僕」、呼びかけに三つ葉の本名で子供の時から使っていると思われる「達っちゃん」を用いる。次に、文末の表現にも違いがある。疑問文で、三つ葉は「か」や「かよ」、「だ」が現れ、より男性的な表現となっている（「あれがか?」「きいたか」「間に合うのかよ」「なんで虐められてんだ」「なんだ」など）のに対し、良は、通常はジェンダーが明示されない中立的表現（「食事中だった?」「帰ってきたの?」「何が?」など）を用い、「か」が現れるのは「よさそうなところだと言ったじゃないか」と攻撃的な発話を行った一例のみである。さらに、「依頼・指示」を示すには、三つ葉は直接的な命令形（「やめちまえよ」「よせ」「そう熱くなるなよ」など）を用いるが、良が使うのは怒っている場合にすら「やめてよ。寄席じゃないんだから」と授受動詞を省略した「～て」の形であり、もしくは「達っちゃん、お、怒ったらダメだよ」「忘れてくれたら困る」などの迂言的構造である。即ち、良の方が、語彙・文末形式・発話構造の全てにおいて、丁寧度が高く、男性性表示の少ない表現を選択している。

この二人は、三つ葉が兄貴格であり上下の差はあるが、幼少時から親密な関係で、年齢差を「わきまえ」る（井出2006, p. 109）必要性はない。二人の丁寧度・ジェンダー標示度の差は、個人の個性の違いによるものと考えられ、下町育ちの蕎麦屋の息子と外科医を父に持つ中流家庭の子という背景を読み取ることができる。

### 3. 2. 談話的意図の表出

本作品には、談話の中での変移が観察され、話者が様々な意図を

表現している。

まず、気まずさが生ずる潜在的可能性がある場合に、文末レベルやジェンダー表現などが談話の中で変化する。例えば(11)は、一般的には失礼と思われる良の発話に、三つ葉が普段とは違って丁寧体の、いかにも嘸家を思わせる口調で応じている。

- (11) 「おまえさ、本当にテニスうまいんだな。」俺は心から誉めた。「すごいなあ。」「だって、そんな」良は目をそらした。「普通の人よりは少しマシだけど、プロになれるほどじゃないよ。インカレだってベスト16が最高で・・・」「うまいよ。小三文師匠がトリで前座嘸をらくらくとしゃべってるみたいな感じがしたな」良は気味が悪そうな顔をして、俺を上から下まで丹念に眺めた。「達チャン・・・」ささやくように言った。「Gパンが似合わないね。」「さいですか」俺は誉め言葉と受け取って、じゃあなと手を振ってその場を離れた。(pp. 87-88、改行を省略、太字は筆者、以下同様)

三つ葉がいつもの「従兄の達也」でなく「嘸家の三つ葉」として応じたことによって、良の悪口の底に「いつもの着物の方が似合う」という気持ちを感じ取ったことが暗示される。「そうか」と普段の口調で応じてその場を離れたら、額面通り受け取って気を悪くしているという印象を与えてしまうだろう。

(12) では、三つ葉が一貫して普段の口調を変化させないのに対し、ちまきは、次々と口調を変化させている。

- (12) 「どうしたんだよ？元気ないじゃんよ？」何かと仕事でいっしょになる柏家ちまきが糸のような目を見開いて心配してくれる。「三ッちゃんはイキの良さが売りなのに」小三文師匠の説教を話して困っているんだと言うと、「真面目なんだからア」とふざけた励まし方をする。「小三文師匠は、稽古が面倒臭いだけだってば」「ちまきはどうか？嘸のことで巻之助師匠に怒られないか？」俺があくまで真面目に尋ねると、

「会うたびにギャーギャー言われてますよ」とさらりと答える。「あの人の毒舌ってただモンじゃないでしょう？俺、右から左に抜けちゃうもん。じゃなきゃ生きていけないもん」  
「強いな」「しぶといのよ、あたしァ」女声で茶化してみせた。(pp. 96-97)

ちまきは、普段の男性的な話し方で声をかけ、続いて、軽い口調で通り一遍の励まし（三つ葉から見るとそれは「ふざけた」、即ち、「表面的な」ものと感じられる）を口にするが、あくまでも真面目に話し続ける三つ葉に、これは表面的な応対ではすまされないと感じてそれまでの軽い口調を改め、真面目な丁寧体で、しかし「さらりと」、自己開示をする。そして、次の瞬間には女性的な文末形式「～もん」を使い、更には本格的に女の声色まで用いてふざけて見せ、一瞬見せた真面目な顔を韜晦する。これは、因（2003）で定義した「他人格モード」、即ち、文体による冗談という手法で、真摯さを表出し且つ重苦しくはしたくないという相反する要求を両立させるために、ジェンダーの偽装が行われているのである。

三つ葉は、言い切りや直接的な質問を多用し男性的印象の強い話し方をするが、「ぞ」「ぜ」などの代表的男性専用形式とされる終助詞を殆ど使用しない。ただ、子供になぐりかかろうとした湯河原を止めようとして自分が殴られてしまった、緊迫した場面の発話には「ぜ」が現れる。

- (13) こづかれた頬を押さえて、「ああ、いてえ。こりゃ明日は腫れる。晴れるならいいけど、腫れじゃたまんねえや。これでも商売道具の面なんですぜ。」・・・(中略)・・・  
「落語が野球解説に役立ちますかね?」「わからん」湯河原は吐き出すように答えた。「わからんが、とりあえず見にきた。」「見ていきますか?」(pp. 110-11)

三つ葉は、(13)にも表れているように、湯河原に対し通常は丁寧体で話している。年長者を窘めるという難しい発話行為を行うに

あたって、彼は、「晴れと腫れ」や「顔が商売道具」など「ユーモア」という内容上の工夫と並行して、「自己向けの発話を装う普通体」「改まった丁寧体とぞんざいな男性ジェンダー標示形式の併存」という表現の技巧を用いている。直接普通体で話しかけるのは失礼だし、丁寧体では真面目な抗議となって角が立つという板挟みを回避する工夫である。

以上、普通体による会話と一口に言っても、話者の個性による変異があること、同じ普通体でも自己向けか相手向けかによって使用許容度が異なること、ジェンダー標示形式が選択的・構築的に用いられること、談話の中で表現の技巧として文体レベルやジェンダー表示などの変移が起こることが観察された。

#### 4. 大学生の自然会話に見られる、個人的特徴と語用論的意図の表出

次に、普通体基調の自然会話を分析する。本稿の末尾に全容を示す会話は、九州大学の仮に「海」（長崎出身）と「山」（神戸出身）と呼ぶ二人の学生の間のものである。

##### 4. 1. 個人的特徴の表出

海と山とは学年が同じで、対等な立場の典型と言える。両者とも自称にはリラックスした「俺」を用いており、相手に言及する言語表現は用いていない。出身地は関西と長崎で、方言はかなり異なるはずであるが、それを思わせる発話は少なく、「危ないけんねえ」（海24）、「甲子園球場ぐらいちやうんかな」（山13）くらいである。両者とも「だ」の代わりに「～や」を一貫して使っているが、これは関西以西に広く見られる特徴で、二人に共有されていると考

えられる。全般的に両者は、相手の口調に同調することに努め、自分の個人的特徴の表出は抑制しているように感じられる。

#### 4. 2. 談話的意図の表出

4. 1. で述べた語彙や文末形式だけでなく、やりとりの仕方にも、お互いに同調する姿勢が強く見られる。まず海は、相槌を頻繁に打っており、それも「へええ」「すごい」など、相手の発話への関心を強調するものが多い。山は、情報提供を多く行っており相槌を打つ側に回ることは少ないが、「そうそうそう」「見に行った見に行った見に行った」(山14, 18)と、相手の持つ前提を肯定するのにやや大げさとも言えるくらいに強調するのが印象的である。

また、普通体基調の会話ではあるが、普通体述語の言い切りで発話が終結することは少ない。交替直前の発話を見ると、下の表2に示すように、末尾の形式・言いさし・音調などを用いて会話継続への意図を示すもの(b-c)が多く見られる。「ね」「よ」など相手への働きかけを示す終助詞も付加せず下降音調で断定的に言い切る発話は海15、26だけであるが、いずれも自己主張でなく相手の発話の趣旨を強く肯定する発話であり、やはり相手への同調を示している。

表2：終結部分の発話の種類

	海	山
a. 質問する	1,8,13,18	24,27,30,31
b. 継続を暗示する ～て、～たり、 文節(下降音調なし)、 述語のみ(下降音調なし)	22,32 14,20,	3,5,6,10,11, 8,9,23, 19

c. 終結を明示する形式を回避する ～し、～けど、～から、 名詞・名詞+助詞(下降音調あり)	16,24,25,27,28	1,2,4,7,12,15,17,18,26, 16,22,
d. 自己向けの発話形式をとる ～なあ、		13,20,25,
e. 終結の形式を取る ～よ、～ね、 述語のみ(下降音調あり)	17,21,29,30,33, 15,26	28,29,32,33
f. あいづち	2,3,4,5,6,7,9,10, 11,12,19,23,31,	14,21

相手の発話を途中で引き取って先を続け、二人で一つの文を完成させる現象も見られる(海20-山20、山23-海24)。

相手の言うことに異議を呈している唯一の発話は海の14「甲子園球場を観光地と言うかとどうかはあれだね、ちょっと問題ありそう」であるが、それに対し山は「そうそうそう」と強く同意する。しかし海はその直後にこの主張を枉げ「観光地ちゃー観光地だ」と相手の元の発言を支持する。つまり、二人とも自分の主張の正しさよりも相手に同調することを重視している。

海と山は、相手が応援している野球チームのことを初めて知ったという点などからして長い間の知り合いとは思われない。この会話は、まだそれほど親しくない場合には普通体基調の会話であっても決してざっくばらんに行われるわけではなく、内容面でも形式面でも相手への同調を目指した選択がなされるなど、慎重な配慮が働いていることを示している。

## 5. 考察—現在の日本語教育に欠けているもの

2節で分析したように、日本語教育教材の多くは普通体基調の会話を提示しており、しかも、私的・社会的両方の場面を取り扱っている。また、対話者間の関係は相互的なものだという前提を持つ傾向の強い多くの学習者に対する措置として、対話者間の使用レベルが非対称である会話を多く提示し、普通体で話しかけられても自分は丁寧体を使うべきことを強調している。これらは、知識も運用力もまだ少ない学習者への対応として十分肯けるものである。

しかしながら、上位者の使用レベルについて、使用例を示すだけでそこに反映される話者の意図に言及がないこと、即ち、上位者には両レベルが選択でき、ある意図があつて普通体が選択されるという点についての情報提供が行われないままにモデル会話を提示していることは、普通体使用について学習者に偏った理解を植え付ける恐れがある。例えば、典型的な文末レベル非対称の例として、コンビニの店長がアルバイト店員に普通体で礼を言い、店員は丁寧体で応ずるという会話が提示されている（『げんき』18課）。こうした場合上位者である店長は、必ず普通体を用いると決まっているわけではなく、どちらかを選ぶことができるのであるが、彼は、「さっきは君のおかげで助かったよ」などと普通体を選択している。これは、「脱距離化」（滝浦2005、因2006）による親密化であり、本音を吐露していることを明示する効果を意図したものであると考えられるが、学習者はこの意図を正しく察知しないかもしれない。意図的選択の可能性そのものに気付かなければ「上位者はその立場を明示するのが自然なのだ」と、本質主義的解釈をして親密化への意図を見落とすであろう。また、意図的選択の存在に気づいてもそれが親和的意図であること（因2005b）を見誤れば、「上位者が自分の優越性を示しているのだ、お礼は言っているものの自分の方が上であることを忘れるなど言っているのだ」と、話者の意図とはかけ離れ

た解釈をするかもしれない(因2004b、2005a)。

日本語の会話においては、話者の属するグループにおける立場の認識が決定的な影響力を持っており、その認識は単に丁寧度のレベルや尊敬語の使用に反映するだけではない。親密さの表出にも、社会的上位者はレベルの移行という手段を用い得るが下位者は用いることができないなど、上位者と下位者では選び得る表現ストラテジーの種類、頻度、発話権や主導権の取り方など様々な側面で違いが見られる(松村・因2001)。女性ジェンダー標示形式については、使用頻度が低くなっているという報告(尾崎1999)がある一方で、特定的话题で用いられている(谷部2006)、会話ストラテジーとして構築的に用いられる(因2003、2004a、2005b、2005c、2006)という報告もあるなど、実態や用法の多様性についての観察が行われている。一方、男性の普通体基調の話し方については、部分的な観察はあるものの(因2004a、2007)、その姿を包括的に扱うものは管見では殆ど見られない。しかしながら、3節と4節で扱った限られたデータからでも、同じように若い男性の発話にも個性による違いがあること、また、同じ普通体でも自己向けか相手向けかによっても効果も使用許容範囲も違うこと、緊張を孕むやりとりを行う場合やまだ十分に親しくない場合には、普通体を基調とした会話でも内容や表現に慎重な調整がいろいろと行われることなどが観察された。

このような実情について知らされていなければ、学習者は、相手の発話に込められた意図を見落とししたり、普通体で会話を行なう以上配慮はあまり必要ではないと考えて直接的すぎる発話をしてしまったりする恐れがある。普通体を基調とする会話では、多かれ少なかれ寛いだ気分を醸し出すことが求められるが、これは、公式の場面で改まった態度を表わすこと以上に難しいのではないだろうか。上位者に対して丁寧体・尊敬語の基本を維持しつつ親しさや寛いだ感じを示すにはどのような具体的な手段があるのか、或いは、十

分親しいため丁寧度を上げると嫌味になるような人間関係において配慮を示すにはどうすればいいのか、などについての情報を日本語で長く続く人間関係を築きたいと考えている学習者たちに提供することは、日本語教育の重大な責務の一つであると考えられる。

そうした語用論的運用力を養成するためには、一つの模範モデルを示して模倣させるといった指導方法が機能しないことは言うまでもない。学習者自身が表現と効果の関係を的確に解釈して自分の意図に合う表現を選択できるようにするには、1) 多様な発話のサンプルを系統立てて、2) 文脈における解釈とそれを生み出す原則についての情報と共に、提示することが必要である。

## 6. 終わりに

本稿では、日本語教材における普通体基調の会話の導入の実態の分析と若い男性話者による普通体基調の会話の分析を通して、普通体会話の発話の多様性やそこに込められた意図などについての提示が看過されていることを示した。

若い男性話者の普通体基調の会話については実態観察が決定的に不足している。多くのサンプルを収集し、レベル交替、ジェンダー表現の使用、方言の使用、その他の文体的特徴の使用などに着目して、個人的特徴の表出や談話の中での意図の表現がどのように行われているかを解明していくことが急務である。

〈 参考文献 〉

- 井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』大修館書店
- 内田伸子 (1997) 「会話行動にみられる性差」『女性語の世界』  
pp. 74-93. 明治書院
- 遠藤織枝 (2002) 「男性のことばの文末」現代日本語研究会編  
『男性のことば・職場編』ひつじ書房pp. 33-45.
- 岡野喜美子他 (1994) 『Total Japanese』凡人社
- 尾崎喜光 (1999) 「女性専用の文末形式のいま」『女性のことば・職場  
編』 pp. 33-58
- 梶原綾乃 (2003) 「留学生と日本人学生の交流促進を目的としたコミュニ  
ケーション教育の実践」『日本語教育』117、pp. 93-102
- 現代日本語研究会編 (1997) 『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- 現代日本語研究会編 (2002) 『男性のことば・職場編』ひつじ書房
- 蔡茂豊 (1987) 『現代日語文的口語文法』大新書局
- スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ』
- 桜井隆 (2002) 「「おれ」と「ぼく」」現代日本語研究会編『男性のこ  
とば・職場編』ひつじ書房、pp. 121-132.
- 佐藤多佳子 (2007) 『しゃべれどもしゃべれども』新潮文庫 (単行本発  
刊は1997年、新潮社)
- 日本語教育学会編 (2005) 『新版日本語教育辞典』大修館書店
- 高崎みどり (1996) 「テレビと女性語」『日本語学』 (15) 9月号、  
pp. 46-56.
- 滝浦真人 (2005) 『日本の敬語論:ポライトネス理論からの再検討』大  
修館書店
- 田中共子・藤原武弘 (1992) 「在日留学生のタイ人行動上の困難—異文  
化適応を促進するための日本のソーシャルスキルの検討—」  
『社会心理学研究』第7巻第2号、pp. 92-101
- 谷部弘子 (2006) 「女性のことば・職場編」に見る終助詞「わ」の行方  
『日本語教育』130号、pp. 60-69

- 因京子 (2003) 「マンガに見るジェンダー表現の機能」『日本語とジェンダー』第3号、pp. 17-36
- 因京子 (2004a) 「ジェンダー表現の機能」『言葉のからくり：河上誓作教授退官記念論文集』英宝社、pp. 773-85
- 因京子 (2004b) 「マンガ読解に見る韓国人学習者の日本語理解」『韓日言語文化研究』第5号、pp. 63-88
- 因京子 (2005a) 「日本語学習者の日本語会話解釈上の問題点—日本語学週者によるマンガ理解を通して—」『比較社会文化』第11巻、pp. 83-92
- 因京子 (2005b) 「日本語のポライトネス—その制度的側面と語用論側面—」『韓日言語文化研究』第6号、pp. 35-66.
- 因京子 (2005c) 「女性語のゆくえ：絆として鎧としての女性語の可能性」『言語文化研究叢書XV: 言語と文化のジェンダー』pp. 30-45、九州大学言語文化研究院
- 因京子 (2006) 「会話ストラテジーとしてのジェンダー標示表現」『日本語とジェンダー』ひつじ書房 pp. 53-72
- 因京子 (2007) 「翻訳マンガにおける女性登場人物の言葉遣い—女性ジェンダー標示形式を中心に」『日本語とジェンダー』第7号
- 陳伯陶 (1997) 『日本語と修辞』大新書局
- トムソン木下千尋・飯田純子 (2002) 「日本語教育における性差の学習：オーストラリアの学習者の意識調査より」『世界の日本語教育』12号、pp. 1-20
- 中島悦子 (1997) 現代日本語研究会編「疑問表現の様相」『女性のことば・職場編』pp. 59-82. ひつじ書房
- 中村桃子 (2001) 『ことばとジェンダー』勁草書房
- 日本語教育学会 (編) (2005) 『新版日本語教育事典』大修館書店
- 松村瑞子・因京子 (2001) 『日本語の談話におけるスタイル交替の実態とその効果についての分析』平成10-12年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 松村瑞子 (2005) 「少女マンガの言葉遣い」『漫画研究への扉』梓書院、pp. 111-54

- 坂野永理他著 (1999) 『初級日本語げんき』 The Japan Times
- 三牧陽子 (2001) 『対話における待遇レベル管理の実証的研究』 大阪大学留学生センター
- 三牧陽子 (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示-初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に-ポライトネスに応じた言語形式と人間関係の認知」 『社会言語科学』 第5巻第1号、pp. 56-74.
- メイナード、泉子・K (2004) 『談話言語学』 くろしお出版
- メイナード・泉子・K (1993) 『会話分析』 くろしお出版
- Makino, S & Michio Tsutsui (1989) *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*, The Japan Times.
- Maynard, S. K (1990) *An Introduction to Japanese Grammar and Communication Strategies*, The Japan Times.
- Mizutani, Osamu and Nobuko Mizutani (1977) *Introduction to Modern Japanese*, The Japan Times.
- Thomson, Chihiro Kinoshita and Sumiko Iida (2004) "Gendered language in Japanese: definition, perception and reality" Linguistic Association of Canada and the United States, the thirty-first LACUS Forum, University of Chicago, July 27-31, 2004

**資料：男子大学生二人の会話 (2006年5月、福岡市にて録音)**

海1：：高校どんな高校だった？

山1：俺、通ってたのは兵庫県西宮東高校というんやけど

海2：うん

山2：そこの高校ね、あの甲子園球場って兵庫にあるんやけど

海3：ああ

山3：その甲子園球場に地理的に言ったら一番近い高校で

海4：へええ

山4：まあ、だけど実際出場したことは一回もなくて。まあかなり周りから、なんか近いくせに遠いなあて。もう知られたことやけど。

海5：ああ

山5：まあ、まあそういう高校で、結構変わってる高校で、一コマ65分授業で、

海6：へええ

山6：結構変わってる高校で、月曜日から金曜日までその全部5時間5コマあって、結構変則的やから、給食ってゆうか昼休みは12時10分からもう始まるから、結構まあ早く飯が食えるから、いいけど。まあなんか結構変わってる学校やったから。あと、文化ホールを、公立高校のくせして文化ホールを所有してて、

海7：へええ

山7：結構よく有名人とかも来てたけど

海8：ええ誰が

山8：たとえばね、あの、あの、自分と同じ高校に通ってた、要するに自分の先輩が、で今芸能人にやってる人結構来てて、例えば常盤貴子とか

海9：ええ、すごいやん

山9：堤真一とか

海10：ええすごい

山10：なんか、プロ野球選手も出てるけど、成本というプロ野球選手が出てて、その人もたまに、たまにというか一回来てて、

海11：うん

山11：まあ、そういう学校っていうか有名人もだけど、結構周りの高校にも有名人が多い。何か隣の学校は山崎方正が出てたり、で、近くの中学校から安田大佐がその（不明）、あと藤原紀香の実家があったり

海12：へええ、すごい

山12：まあこんな感じかな。まあね、兵庫県自体そんな甲子園球場以外全然何も観光地とかもそんなの無いからね。

海13：観光地ないの？

山13：まあ、ないね。まあ、それこそ甲子園球場ぐらいちゃうんかな。

海14：甲子園球場を観光地と言うかどうかはあれだね、ちょっとね、問題がありそう

山14：そうそうそう

海15：：観光地ちゃ一観光地だ

山15：うん、まあ。高校野球もうすぐってか夏休みまだあるし、まあ俺も今年も多分見に行くと思うけど。

海16：どのぐらい。何分ぐらい

山16：距離がそうやね、徒歩で五分ちょっとぐらい。

海17：近いね

山17：かなり近いってね、ていうか、あの、学校にいたらその試合の歓声聞こえてくるぐらい近いから

海18：へえ、すごいね。じゃ結構見に行った？試合

山18：見に行った見に行った見に行った。結構。うちは阪神ファンやからプロ野球でも阪神の試合を見に行ったことがあるし

海19：へええ

山19：高校野球は毎年、まあ、とりあえず兵庫県代表の試合は見に行くけどこここんのどこ何かずっと初戦とか敗退続いとってしまいちやから、まあ、今年は頑張るとりあえず一回戦は突破してほしいなと。まあできたらその俺の通ってた東高校出てほしいけど、まあ43年の歴史のなかでまだ一回も出てないから、そろそろ出てくれたらいい

海20：俺もね、あんねえ、この間チケットもらう予定でねえ、今週の

ねえ土曜日にねえ、あの巨人対ソフトバンクを見に行く

山20：予定？おお、ソフトバンク。ソフトバンク対阪神この間やってた。交流戦でやってた。どうやったんかなあ

海21：まあ多分負け越してるね 阪神がね。

山21：そう

海22：一勝二敗で

山22：交流戦だけのその順位でいったら阪神多分今三位ぐらい

海23：そうそうそうそう

山23：ロッテがなんか交流戦になってから強い。なんか

海24：危ないけんねえ、ちょっと巨人が危ない

山24：そうやね巨人、巨人ファン？

海25：巨人ファン

山25：ソフトバンクじゃないんや

海26：違う違う

山26：てっきりソフトバンクかと

海27：俺はねえアウエー状態

山27：アウエー？

海28：福岡

山28：ああ。巨人今年は強いね

海29：巨人面白いね

山29：そうやね。阪神対巨人、争いになるか。セ・リーグもプレーオフやりゃあいいのにな

海30：来年からやるらしいよ

山30：あそう？

海31：まあ

山31：マジ？

海32：まあ、今年まで？

山32：わー、やりゃあ、セ・リーグもプレーオフやったら面白いと思うな、どうなるかね

海33：楽しみやね

山33：そうやね

海34：今年は楽しみです。

**Qualitative Analysis of the Plain-formed  
Conversation in the Teaching Materials and  
Natural Plain-formed Conversation:  
—Focusing on Speech by Young Male Adults—**

**CHINAMI Kyoko and WANG Long**

Abstract:

This paper is part of the efforts to find out what information and training should be provided for the younger male learners of Japanese who want to acquire pragmatic proficiency at more relaxed speech situations. We analyze the introduction of plain-formed conversation in the representative teaching materials in English and in Chinese, and two kinds of data of authentic conversation: the one is from a contemporary novel and the other is a naturally occurring conversation between two university students. Our analysis shows that in spite of the efforts to present realistic models of plain-formed conversation, the teaching materials are far from giving a sound understanding of the variations found in authentic conversations. The stylistic features including plain and polite levels, gendered expressions, and conversational structural modification such as ellipsis, are observed to be used in a dynamic way to represent the speaker's personality and his/her conversational intentions. It is necessary to provide the learners with various realistic samples of conversation in a systematic way along with the explications about the actual effects of the forms in the specific contexts.